講義　源氏と源氏以後

――第一講・「文学」と「効用」の問題――

横井　孝

口上

本「講義」をはじめるにあたって、その契機となった二冊の本がここにある（次頁写真参照）。

その一は『講義　日本物語文学小史』と題されたA5判ハードカバー、全三八二ページの一冊。第一講「日本物語文学史の方法論」からはじまり、神話、『竹取』『落窪』『伊勢』『源氏』『今昔』、御伽草子、『宇治拾遺』を論じ、最終講「文学史としてのtext」に補講二章を付しておえる、という、散文文学史のおおきな構想のもとになる一冊。

その二は『講義『源氏物語』とは何か』と題された四六判ハードカバー。全一四〇ページの小冊だが、中身は第一講「『源氏物語』の骨格」、さらに「物語叙述の様式」「皇統譜と主人公の系譜」から説き起こし、『源氏物語』の和歌、垣間見、邸宅と庭園、消息、音楽、若菜の巻、宇治十帖を論じ、補講として「物語学における『源氏物語』」を論じてとじめとする。小ぶりな外見ではあるものの、『源氏物語』のそれこそ「骨格」を論じ尽くそうという意欲がみえる一書である。

いずれも著者は、同志社大学教授・廣田收（おさむ）。

「講義」と冠するように、前者は「二〇〇四年度から五年間、勤め先の大学で国文学科の二、三年次の学生を対象とする「日本文学史」の講義を担当」したことが機縁になって、講義の際の資料などを省略して「文学史に対する私の拙い考えだけを纏め」（はじめに、一～二頁。傍点廣田）た、という。

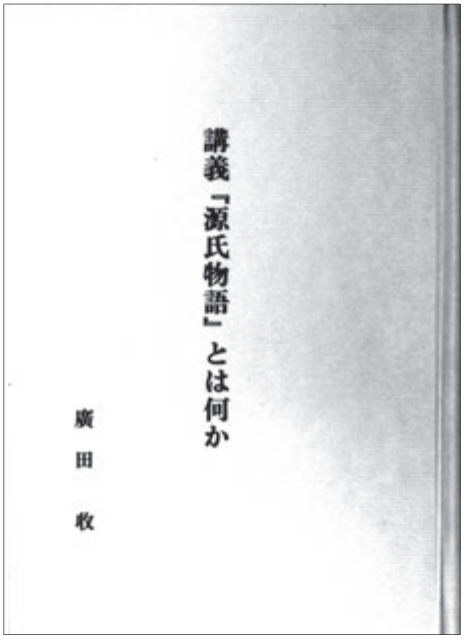
また、後者は「二〇一〇年度と翌一一年度……奈良女子大学で、『源氏物語』について講義」（はじめに、二頁）した内容の公開であり、「『源氏物語』について、今私の考えていることの殆ど全てを急ぎ足で書い」（あとがき、一三八頁。傍点廣田）たものという。

もとより「講義ノート」ではない。また単に講義内容を紙上で再演するだけのものでもない。あくまでも、実際の「講義」の土台となる、物語文学史あるいは『源氏物語』に対する、著者における最新の体系的な研究成果をしめすものであったと考えられる。

〔写真 1〕廣田收『講義 日本物語文学小史』ジャケット

この二冊の本。前者は「金壽堂出版」とあるものの、著者の勤務校・同志社大学の学内助成で刊行されたものというし、後者も発行者名も著者とおなじく、つまり私家版であり、両方とも一般には入手しにくい本となっている[1]。ために、やや詳しい紹介になったかとは思うが、本稿が「講義……」を名のる理由は、これでもうあきらかになったであろう。

本稿のきっかけには、廣田と同様に、本務校外で「源氏と源氏以後」のテーマで半期「講義」をもたせていただいたところにもある。その「講義」のための準備をしながら、



〔写真 2〕廣田收『講義 『源氏物語』とは何か』表紙

廣田の二著のひそみにならいたいと思った。したがって、本稿は、いわばオマージュ hommage であり、エピゴーネン epigonen でもあり、かつ模倣 pastiche にすぎないのだが、一方では、物語史の標題をかかげる前著『講義　日本物語文学小史』には比較的手薄な分野と見うけられる、平安後期物語と『源氏物語』との関連について補足しておきたい、という試みでもあるのだ。

もとより廣田の二著のように体系化や問題点の網羅的把握を目ざすものではないから、「源氏以後」をあつかうとはいえ、偏頗なものにならざるをえないだろう。もとは「講義」の内容であるから、資料の引用などくどいところもあるかも知れないし、はたまた、全体の規模はたかが知れており、単行本の体裁をとるほどでもない。数回分の連載のかたちで「源氏以後」の概略をしめしてゆきたい。

一　孝標女における「影響」のかたち

平安後期の物語に共通する視点とは、『源氏物語』というおおきな天体の圧倒的な引力（影響）の問題といいなおすことができるだろう。ひときわおおきな天体が、多くの惑星を取りこんで太陽系を形成しているように、平安後期の物語も『源氏物語』の引力に繫留されている。

『源氏物語』の影響は、表現や人物造型・状況設定の肖似性などの指摘をとおして議論されるのが通常であろう。たとえば表現。『平安後期物語引歌索引』[2]によれば、『源氏物語』からの引歌と指摘される箇所だけでも（カッコ内は『源氏釈』を典拠とする例も含めた場合）、

『狭衣物語』　六一（六八）
『夜の寝覚』　二七（三二）
『浜松中納言物語』　六（　九）

という数値にのぼる。そのほかの引用・援用、物語構造の類似なども多く指摘されており、それだけでも相当な数の例をあげることができる。

廣田收は『講義　日本物語文学小史』の第一講「日本物語文学史の方法論」のなかで、こういっている。

> そもそも、古典においてひとつの作品 text が、他の作品から影響を受けたということを、どのようにして証明できるでしょうか。私はひそかに、text と text との間に共有される構造があれば、それは直接かどうかは別として、伝播や影響のあったことの証明だと思っています。（八頁）

さりげなく書かれてはいるが、ともすれば右にみたような表面的な肖似性にとどまりがちな「影響」への視点について、一歩踏みこんだ見解となっている。

ただし、さらにいえば、「影響」とは、内部構造や物語本文などの作品相互で指摘できるものばかりではない場合もあるのではないか。作品を生み出した作者自身、あるいはその作者の立場への関心というかたちでの「影響」という問題もありえたのである。

その一例として菅原孝標女がある。

孝標女については、よく知られている資料がある。御物本『更級日記』奥書である。

ひたちのかみすかはらのたかすゑ
のむすめの日記也母倫寧朝臣女
傅のとの、はゝうへのめひ也
よはのねさめ みつのはま、つ
みつからくゆる あさくらなとは
この日記の人のつくられたる
とそ

（宮内庁書陵部蔵、九三丁オモテ）

彼女が多くの長篇物語を創作したらしいことは、この奥書を契機として周知されており、それぞれの物語が『源氏物語』を引用・援用したものであることは、右にもふれたとおり。しかし、その作者の内面から誘発された旺盛な創作活動が、紫式部の作品そのものとは別に、本人とその娘の宮廷生活に刺激＝「影響」されたところに発している、ということは、近年ようやく議論されるようになった話題なのである。

長久三年（一〇四二）四月一三日、祐子内親王のお供で参内した夜、内侍所を参拝した記録が『更級日記』にある。そのおりに案内をした博士の命婦に対して「人ともおぼえず、神のあらはれたまへるかとおぼゆ」（三三一頁）[3]と、おおげさにも思えるほどの感激を記している。この博士の命婦は「しるたよりあ」る人であり、

この博士の命婦こそ作者にとっては宮廷での頼みの綱とも言うべき重要人物であり、作者のおそらく強力なバックアップを果していた女官だったに違いない。孝標女は折あらばと、自分の才を生かすことが出来る場を求めて、半生を歩み続けてきたのである。その願望が果せるかも知れないというときめきがこの博士の命婦の出現によって俄然高鳴ってきたのであろう。[4]

と、その感激の根源を説いてみせたのが津本信博だった。ただし、『更級日記』の詞章は簡略で、かならずしもその真情に踏みこませるに充分な記述があるわけではない。

福家俊幸（ふくや）は、津本の指摘をうけ、さらに孝標女のおかれた状況に目を向ける。

作者の心を占めたのは、紫式部が物語創作によって、切り開いた一族の栄達――具体的には、娘賢子が後冷

泉帝の乳母に就任したという出来事ではなかっただろうか。この大弐の乳母は万寿二年、親仁親王（後の後冷泉天皇）の誕生にともない、その乳母となった。賢子の乳母就任は母紫式部に対する皇太后彰子の厚い信任に拠るものであり、その信任は『源氏物語』創作と不可分であったろう。孝標女が物語作家であったとすれば、偉大な先達のように、己の物語創作が、自らと一族の栄達を切り開くことを期待していたとしても、それは十二分に可能性のある期待であった。[5]

――と。そして、孝標女が紫式部の娘・大弐三位賢子の存在をつよく意識したはずの機会が、永承五年（一〇五〇）六月五日庚申祐子内親王歌合だったであろう、という。

かつて賢子における『源氏』の影響を論じたおりに、当該歌合についてふれたことがある。[6]いまそれを略述すると、こんなふうになるだろう。――当時の男性官人・女房ともに精鋭を集えた公的晴儀歌合であったこと、賢子は江侍従・伊勢大輔・出羽弁・小弁・相模らを率いて左方の筆頭に列せられ、対する右方には藤原資業・兼房・家経・範永・経衡・能因法師ら、範永・経衡など「和歌六人党」のメンバーを含む顔ぶれであったこと、などが特筆される歌合であった。

賢子の呼称は「典侍」と記録されており、あきらかにその地位の重みを背負っており、この歌合の実質上の主催者・藤原頼通との関係もあって方人の筆頭に選ばれているのである。一番の兼題は「桜」で、賢子は資業を相手にして出詠し勝ちをおさめている。

歌合当時、永承五年のころの孝標女の動静は『更級日記』では不分明だが、名目上とはいえ、みずからの宮仕え先の内親王家でおこなわれた晴儀について、無関心でいられようはずもない。見聞きする典侍賢子の活躍は、その母にして物語作者だった紫式部の宮廷生活と、孝標女の意識のなかで重ね合わせられるものであった可能性が高い。

福家は、右にひいた一節のしばらくあとに、

……同じ物語創作という営みに従事しながらも、紫式部が敷いたレールのもとに、大弐三位が輝かしく活躍する様子を仄聞するにつけ、自分の主人の主催する歌合だけに、自らとの懸隔に、作者はあらためて思いをはせたのではあるまいか。

皇族の乳母になるという夢告は、その夢をかなえた存在として大弐三位を意識することに繋がり、その母紫式部に対する意識にも繋がっていったと考えられる。少女時代には、見えなかった『源氏物語』のもう一つの姿、現世利益的な姿を年輪を重ねた作者は見ていたのだろう。

と指摘する。『更級日記』のなかに自作への言及がみられないのは、孝標女の「夢」が潰えたのち、悔恨とともにみずから「隠蔽」したものだ、というのである。ここの「夢告」とは、『日記』巻末直前、夫の死後の感懐のなかに、

年ごろ「あまてる御神をねむじたてまつれ」と見ゆるゆめは、人の御めのとして、内わたりにあり、みかど・きさきの御かげにかくるべきさまをのみ、ゆめときもあはせしか……　（三五七頁）

と回想されるものであり、その夢告の内容は大弐三位の姿とまさしく重なりあうものだったし、その「夢」実現のための具体的な行動が初瀬詣であった。

こうした福家の見解を継承して、さらに孝標女の頻繁な物詣（ものもうで）の底意に「現実的な野心」を見透し汲み取ろうとしたのが久下裕利（くげひろとし）であった。

孝標女が寛徳二年（一〇四五）十一月二十日余日の石山詣は、夫下野守橘俊通の上洛を迎えるような形での子宝祈願であって、それは麗景殿女御延子の正子内親王誕生に合わせて、乳母となる最後のチャンスに賭けたのではなかったか。[7]

しかも、右の石山詣の翌年、永承元年（一〇四六）一〇月二五日は、「一代に一度の見ものにて、ゐ中せかいの人だに見る物」の大嘗会の御禊の日であるにもかかわらず、初瀬詣に出発したため「はらからなる人は、いひはらだ」ったけれども、「ちごどものおやなる人は、『いかにもく心にこそあらめ』とて、いふにしたがひて、いだしたつる」（三四一頁）と強行した。久下はこの間の事情を、次のように論じている。

祐子内親王家から主家を替えるという初瀬詣の出仕祈願は、兄定義を頼る訳にはいかなかったということである。新たな出仕祈願は「児どもの親なる人」、夫俊通の理解に支えられ、その援助が期待できたからに他ならなかった。……『春記』（脱漏補遺）永承三年（一〇四八）正月……某大臣の大饗において、五位の蔵人であった前下野守橘俊通が割注に「取主人沓」と奉仕している様が記されている。

ここに言及される『春記』（しゅんき）記事の某大臣とは藤原頼宗のことである。孝標女が三八歳の身をもって子宝祈願をする契機となったのは、寛徳二年四月二〇日に誕生した正子内親王の存在であり、正子の母・麗景殿女御延子は、実に頼宗女であった。初瀬詣の意図は符合するのである。

もとより、『更級日記』冒頭から書きつらねられている『源氏物語』の世界への耽溺のようすは、若き日の憧憬として掛け値なしに読んでおいてさしつかえないものだったろう。その憧憬が、後年のさまざまな物語を手がけるきっ

かけとなったとしたら、それはまさしく「影響」の名にふさわしい現象といえるだろう。

しかし、右のように諸家の論を積みかさねてみると、孝標女における「よはのねざめ・みつのはまつ・みづからくゆる・あさくら」などの大量の作品は、物語創作という「文学」世界への参入であっただけでなく、彼女の「夢」「現実的な野心」を実現するためのひとつの手段であったかに見えてくる。

「文学」を「文学」として創作するだけでなく、なんらかの「効用」を期待する「手段」「方法」として、孝標女の物語は存在しえたのだろうか。

二　「文学」における「効用」の問題

そもそも、不特定多数にむけて書かれたものとしての「文学」など存在しなかった時代のことである。物語であろうが何であろうが、当初は、草稿を除けば、限定一部の写本しか存在しなかったなかで、作者は読者を想定しつつ書きすすめていったと考えねばならない。読者が特定されるということは、作品の内容のいかんを問わず、その読者にむけてのなんらかの意図――つぎにふれる柿本奨（かきもとすすむ）の用語によれば「効用」――がそこに伏在する、ということではなかろうか。

かつて「日記」という形態をとおして、この「効用」の問題についての考えを披露したことがあった。昭和二〇年代なかばから『蜻蛉日記』に「文学的自覚」「自己の生活の真実を反映する文学の創造」を見出そうとする見解が定説化しているなかで、「日記」の第一義が二〇世紀のひとびとが考えるような「文学」であったか、を問うたのである。

……「日記」にかぎらずこの時代の「作品」は、写本という限定的なうつわに盛られていることを、あらためて服膺（ふくよう）しなければなるまい。「日記文学」などという用語が生み出され、研究上では日常的に用いられるようになると、写本という限定的なうつわであることの問題は、ついつい透明化し、「文学」という観念がもてあそばれてきたのだ。(8)

右は、実に常識的なことをいっているに過ぎない。にもかかわらず、ここに疑問を呈した状況は、残念ながら、いまだに変わっていないのではないか。

そうした状況のなかで、柿本奨のつぎの一節は、観念的な「文学」論とは一線を画し、「日記」という「作品」の性質をよくとらえた、至極まっとうな見解ではないかと思うのである。引用が長くなるが、重要な意見なので、なるべく省略せずに掲げておきたい。

……本日記には、作者の半生にわたる生活経験を述べてあるから、それを読むに最もふさわしい人は、これから長い人生行路を歩いてゆくべき若い子女であろう。具体的には作者の養女が擬せられないであろうか。このわたしに女の人生の一つのモデルを見、二の舞をせぬ教訓にしてもらいたいというのが目的でなかったであろうか。もしもそうなら、世間の女が、家柄高い殿方は妻をどのように遇するのでしょうかと、あなたに問うたならばあなたは、こんな実例がありますよ、といって、本日記を用いて話してやるがよい、と作者がいうのは、上記の目的に付随する目的であろう。「ためしにもせよかし」といっている。どちらも効用が目的である。そうした目的を持つに至るには、作者自身の内部において、自身の過去の生活経験に何らかの意義を見出だし、文字を借りて形象化し、世に残しとどめておきたいという述作意識がはたらいたに違いあるまいが、その自目的は、効用という他目的と相関関係にあり、自目的がすべてであったとは思えない。

執筆の途上においては、一般に述作者たるものは、ひたすら創造の意志の化身にならねば、作品を形成することはできないだろう。自身とのたたかいにおいて作品が形成され、作品形成によって自身が生きるというあり方をするのが、すべて創造の意志たるもののあり方であろう。述作者にとって書くことが生きることであり、自身の救いであろう。しかしそれは道綱母に限ったことではなく、述作者一般について言えることで、その意味において、書くこと自体を目的にしているとのみ考える限り、それは単なる観念論になるのではないか。それにこの当時は述作は何らかの意味における効用をねらってなされるものでもあった。また、この作者が自身の苦悩に対処し、作品形成において生きる可能性を見出だして行った、というようなものでもないだろう。(9)

柿本がここで、とくに「書くこと自体を目的にしているとのみ考える限り、それは単なる観念論」といっているのは、『蜻蛉日記』に対して「文学的自覚」「自己の生活の真実を反映する文学の創造」などという意見を意識してのものであり、「述作者にとって書くことが生きることであり、自身の救い」なのは「道綱母に限ったことではな」い、とは強烈な皮肉であった。

旧稿以来、くり返し引用している論であり、おおかたにも理解されている意見であろうとは思われるものの、同調のコミットcommitする論が――稿者は目の届く範囲はきわめてせまいが――すくなく見えるのはさびしい。

ただ、「本文解釈学」を提唱し、独自の詳細な注釈の方法論を展開した萩谷朴に、『紫式部日記』をめぐるつぎのような論述があった。萩谷は、男性の官人たちの記録としての「日記」を引き合いに出して、それが「家記」として一家のために記録されるのと同様な意図をもって『紫式部日記』が書かれたと解し、その執筆には「内在と外在と二つの条件が傭わっていた」という。外在的条件とは、紫式部の夫・宣孝の一族（勧修寺家）をはじめとして、彼女の周辺に日記をのこす人物が多かったことをあげ、さらに、内在的条件として、「娘賢子の将来に必須の参考記録として、この日記を作製しておこうという動機が存在した」ことを強調する。

そもそも、家記本来の効用が、職業世襲の傾向の強い公家貴族社会にあって、子孫のものに、詳細に先例を徴してその職責を全うし、官途に有利ならしめることを目的とした記録参考性にあるのであるから、『紫式部日記』第一部のような実録性に忠実な日記が、その作者の環境条件と相俟って、娘賢子を当初読者として予定して執筆せられたものであろうと推定することは、論理の当然の帰結である。[10]（傍線、引用者の私意）

という。おそらく、さきの『蜻蛉日記』をめぐる柿本の一文とは無関係に書かれたであろうここに、おなじく「効用」の語が用いられていることに注意しておきたい。

「娘賢子を当初読者として予定して執筆せられた」というのは、この『日記』に顕著な「はべり」が多用されていることにもあらわれている、と萩谷はいう。本日記の「はべり」については、一九五六年の神田秀夫の論稿[11]以来、いくつかの論が積みかさねられてきたが、いずれも読者を強く意識した表現とする認識では一致しており、

……通計二十四個の「侍り」が使用されていることは、この日記体記録そのものが、特定の読者に語りかける気持、すなわち作者の読者に対する特別な親近感をもって書き綴られたものであることを立証しているのである。

という萩谷の論をさまたげるものではない。柿本奨が『蜻蛉日記』執筆の当初の読者として「これから長い人生行路を歩いてゆくべき若い子女」を想定し、「具体的には作者の養女が擬せられないであろうか」と慎重にその「効用」を指摘するのに対して、萩谷が右のごとく論じているのは、偶然ではない。日記という作品形態のしからしむるところであり、延いては、ものとして書き残すこと自体が、当初の具体的な意図――「効用」（utility あるいは calculation）を念頭においたものだったのである。

萩谷は、さらに『日記』を「家記」として賢子のために

書き残す、周辺の事情を探っている。――すなわち、寛弘五年（一〇〇八）九月、『紫式部日記』の前半に詳述される敦成親王の誕生に際して、

（藤原有国の）妻の徳子が御乳付けの大任を仰せつかり、その男正五位下蔵人右少弁春宮学士広業（母周防守義友女）が読書博士を命じられ、その妻大左衛門のおもと（橘道時女カ）が御乳母に任ぜられたし、敦成親王の家司が定まった時には、有国の男式部大丞資業（母橘徳子）がその一員に加えられ（『不知記B』）、やがて、後一条天皇の御代には、広業が従三位参議勘解由長官播磨権守に、後冷泉天皇の御代には、資業が非参議の従三位式部大輔にまで昇進しているのである。[12]

ということが――後日談がふくめられているが――、紫式部の眼前でくりひろげられていた。かつては受領階級であり、摂政・藤原兼家の家司でもあった藤原有国は、寛弘五年には従二位参議勘解由長官播磨権守という高位についていたのであり、その妻子については右のとおりだった。つまり、紫式部にとって、有国・徳子夫婦は「すこぶる脅威を感じるとともに、大いに対抗心を燃やす対象」であり、紫式部はみずからの念をつづることによって、賢子の将来に託した、という。

注釈をまつまでもなく、『枕草子』に、よく知られた章段のいくつかがある。

「位こそなほめでたきものはあれ」の段〔一八一〕

女こそ、なほわろけれ。内裏わたりに、御めのとは、内侍のすけ、三位などになりぬれば、重々しけれど、さりとて、ほどより過ぎ、なにばかりのことかはある、また、おほやうはある。受領の北の方にて国へ下るをこそは、よろしき人の幸の際と思ひて、めでうらやむめれ。ただ人の、上達部の北の方になり、上達部の御女、后にゐたまふこそは、めでたきことなめれ。

（傍線、引用者の私意）（角川文庫、下巻・七二頁）[13]

「かしこきものは、乳母の夫こそあれ」の段〔一八二〕

かしこきものは、乳母の夫こそあれ。帝・親王たちなどは、さるものにておきたてまつりつ。その次々、受領の家などにも、所につけたるおぼえ、わづらはしきものにしたれば、したり顔に、わが心ちもいと寄せありて、この養ひたる子をも、むげにわがものになして

……

（七三頁）

「身をかへて、天人などはかうやあらむと見ゆるものは」の段〔二三一〕

身をかへて、天人などはかうやあらむと見ゆるものは、ただの女房にてさぶらふ人の、御めのとになりたる、唐衣も着ず、裳をだにも、よう言はば着ぬさまにて、

御前に添ひ臥し、御帳のうちをゐどころにして、女房どもを呼び使ひ、つぼねにものをいひやり、文を取りつがせなどしてあるさま、言ひ尽すべくもあらず。

（一〇六頁）

前引の旧稿（注6参照）で指摘したように、賢子が母・紫式部の作品を読んでいたことはまちがいない。萩谷がいうような庭訓として『紫式部日記』を受容したかはわかりにくいが、日記が「効用」をめざしたものであれば、最も早いころの読者として、賢子が紫式部の意図するところを受け取っていた可能性は否定できないだろう。

しかし、娘・賢子への「効用」――メッセージだけで『紫式部日記』の全体を括ることはできない。

三　『源氏物語』の「効用」

『紫式部日記』にしばしば自作についての言及があることも周知のことがらである。これも旧稿にふれたことながら、あらためて確認しておきたい。

(1)〔敦成親王生誕五〇日の祝い＝寛弘五年一一月一日〕

御五十日（おほむいか）は、霜月のついたちの日。……上達部の座は、例の東（ひむがし）の対の西面也。……左衛門の督（かみ）、「あなかしこ。此わたりに、わが紫（＝若紫）やさぶらふ」と、うかゞひたまふ。「源氏にかゝるべき人もみえ給はぬに、かの上は、まいていかでかものしたまはん」と聞きゐたり。

（二八〇～二八三頁）[14]

(2)〔御草子づくり＝寛弘五年一一月〕

入らせ給べきこと（還啓）も近うなりぬれど、人〴〵はうちつぎつゝ心のどかならぬに、御前（おまへ）には、御冊子（みさうし）つくりいとなませ給とて、明けたてばまづ向かひさぶらひて、色〳〵の紙えりとゝのへて、物語の本どもそへつゝ、ところ〴〵に、文書きくばる。かつは、綴じあつめしたゝむるを役にて、あかしくらす。……

（二八四～二八五頁）

(3)〔草稿紛失＝寛弘五年一一月〕

つぼねに、物語の本ども、とりにやりて隠しをきたるを、御前にある程に、（殿＝道長が）やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿（道長次女・妍子）にたてまつり給てけり。よろしう書きかへたりしはみなひきうしなひて、心もとなき名をぞとり侍りけんかし。

（二八五頁）

(4)〔消息文〕

左衛門の内侍といふ人侍り。あやしう、すゞろによからず思ひけるも、え知り侍らぬ心憂きしりうごとの、おほう聞こえ侍し。内裏（うち）の上の、源氏の物語、人によませ給

つゝ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそよみたるべけれ。まことに才あるべし」とのたまはせけるを、ふとおしはかりに、「いみじうなん才がる」と殿上人などにいひちらして、「日本紀の御局」とぞつけたりける。いとをかしくぞはべる。このふるさとの女のまへにてだにつゝみ侍ものを、さる所にて、才さかし出ではべらんよ。……　（三一四頁）

(5)〔宮仕え生活断章＝寛弘五年五月か〕

源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例の、すゞろごとども出できたるついでに、梅の下に敷かれたる紙に書かせたまへる、

すき物と名にしたてればみるひとの　おらですぐるはあらじとぞおもふ

たまはせたれば、

「人にまだをられぬものをたれかこの　すきものぞとは口ならしけん

めざましう」と聞こゆ。　（三一八～三一九頁）

紫式部と同様に日記を残し、複数の物語作者であったはずの孝標女が、紫式部とは対照的に、『日記』のなかでは自作についてまったく沈黙を守っている。これは「夢」やぶれた彼女が悔恨とともに「隠蔽」したのだ、とする福家俊幸の評価はすでに本講義・第一節に紹介した。その孝標女にくらべて紫式部の饒舌なこと。

すでにして、日記なるものが「効用」を目途として書かれるものであるならば、自作への言及がどのような意味を持っているのだろうか。賢子が自作和歌に『源氏物語』中の和歌ばかりでなく、『日記』や『紫式部集』のなかからも本歌をえらんでいる状況は、すでに旧稿（注6参照）で指摘している。賢子の身近に母の作品があったことはいうまでもなかろう。とすれば、紫式部における自作の強調は娘に向けてのものではあるまい。

じつはこの問題についても、別の論稿で、紫式部の表現やその方法の周辺に沈淪歌人のそれがあることを、あらためて考えなおすべきではないかと提言したことがある。

沈淪詩（歌）人たちの「憂し」という心境は、紫式部のおかれた環境に近接するものであり、紫式部自身がよく理解し共感しうるところであったと考えられる。紫式部の「作品」と沈淪詩（歌）人たちという、一見縁遠く感じられる取り合わせは、表現において平仄を一にし、アナロジーの関係を示唆する。あるいは『紫式部日記』を沈淪詩（歌）人たちの表現に比喩せしめることも可能なのではなかろうか。[15]

ここに指摘した紫式部の「作品」とは、かならずしも『日記』のみを指すものではない。そこに言及される『源氏物

語』をも包含するはずである。

ここで『源氏物語』の「効用」――というと奇異に聞こえるかもしれない。『源氏物語』は、源為憲『三宝絵』のいうところの「物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物」であり、「男女ナドニ寄ツ、花ヤ蝶ヤト」いうだけのもので「罪ノ根、事葉ノ林ニ露ノ御心モトヾマラジ」のものでしかないはずである。いくら「ものとして書き残すこと自体……「効用」を念頭においたもの」と稿者がいったところで、所詮エンターテインメントentertainmentであり、「女ノ御心ヲヤル」のが「効用」だ、いわれかねないだろう。

しかし、紫式部の伝記類をみれば、どの文献にも『源氏物語』の述作が契機となって、中宮彰子の女房に選ばれた、というふうなことが書かれているはずである。――「それ(『源氏物語』)がやがて道長の耳に入り、式部は宮廷に召し出されることとなった」[16]――のごとく。

もちろん、ことはそう単純ではない。紫式部の父方、そして道長の嫡妻・源倫子の母方に共通の曾祖父・藤原定方があったこともその縁のひとつであろうし、道長がそのころ文化面に関心を持ち、漢籍の収集を積極的にはじめたこととも関連する、ともいわれる[17]。紫式部の出仕は作品ひとつの事由ではないにしても、事前にその人となりを理解するのに、創作が進行している物語の存在は便利であったにちがいない。

とすれば、『源氏物語』にも「効用」effectivenessがあったのだ。少なくとも、結果としてはそういうことになろう。

賢子が親仁親王（のちの後冷泉天皇）の乳母に選ばれたときの『栄花物語』楚王のゆめの巻の一節を見てみよう。

若宮（親仁親王）の御乳母頼成が妻はわづらひてまかでにけり。その後は、讃岐守長経が女の、宰相中将の子生みたる、また、大宮（皇太后彰子）の御方の紫式部が女の越後の弁、左衛門督（藤原兼隆）の御子生みたる、それぞ仕うまつりける[18]。

すくなくとも『栄花物語』の作者圏では、賢子という人物は「大宮の御方の紫式部が女」という認識のもとにあった、ということであろう。というのも、稲賀敬二が指摘するように、彼女は「まだ母が存命中から皇太后宮彰子のもとへ出入りしていた」からである。まさしく「親の七光り」である。

……著名な紫式部の娘ということで、彼女のまわりには多くの男性があらわれる。

道長の息子で、後に堀川右大臣と呼ばれた頼宗……藤原公任の子で、後に四条中納言と呼ばれる定頼……

賢子は万寿二年（一〇二五）、左衛門督藤原兼隆との間に一女を設けた。兼隆は「七日関白」と呼ば

れた道兼の息子で、当時四十一歳であった。賢子は二十六、七歳位のころである。[19]

『更級日記』作者・孝標女は賢子よりも一〇歳ほど年下だが、賢子の華やかな男性遍歴について、羨望を禁じえなかったか、苦々しく思ったか。いずれにせよ、つぶさに観察できる年齢だった。

『栄花物語』が証言するように、賢子が母紫式部の七光りで親仁親王の乳母に選ばれたとしたら、そして、稲賀が評するように「著名な紫式部の娘ということで」藤原兼隆との交際があって出産したばかりということであったとしたら、彼女は二重に母の七光りのもとにあった、ということになる。

その後、賢子は典侍に任じられ、『枕草子』のいう「御めのとは、内侍のすけ、三位などになり」という典型の路線を踏襲し、さらに精鋭を集えた公的な晴儀歌合で活躍する。一方は方人の筆頭として注目され、他方はみずから仕える主家の歌合にもかかわらず、出席すらかなわない身であった。

それもこれも、同じく物語作者であった孝標女を刺激したのである。歌人としての自負をもっていたとしたら、その「刺激」への思いはなおさらであろう。福家俊幸がいう（本講義第一節）ように、「偉大な先達のように、己の物語創作が、自らと一族の栄達を切り開くことを期待し」たとしても無理からぬことなのである。

かくして、孝標女における物語創作は「効用」を期待したものだったと考えたい。紫式部が夫の死後、物語の執筆をはじめたころには、それはまだ「女ノ御心ヲヤル物」であり、「男女ナドニ寄ツ、花ヤ蝶ヤト」いうだけのものであったろう。やがてそれが機縁となって宮仕生活をしてゆく過程で、いつしか物語の「効用」に思い至ったとしても不思議ではあるまい。

賢子が「大弐三位」と通称されるのは、さまざまな男性遍歴を経たのち、三〇代後半のころ高階成章（たかしなのなりあきら）の妻となり、夫成章が天喜二年（一〇五四）大宰大弐に任ぜられたことに由来する。天喜六年（一〇五八）、大宰府で没したとき成章は六九歳であった。「欲大弐」（『尊卑分脈』）と陰口をたたかれたほどの成章の遺産で、賢子の後半生は富んだものになったと考えられている。

萩谷朴は、大弐三位賢子の生涯を総括して、つぎのように評した。

……当時の貴族社会の中にあって、家司層第二階級としての権益を最大級に享受したのは、紫式部の一人娘大弐三位賢子であった。しかもその方法は、紫式部がまざまざと見せつけられてさぞかし切歯したであろう

一条天皇御乳母とその夫参議〔藤原〕有国の先蹤と同じく、後冷泉天皇の御乳母としての賢子が夫非参議の三位大弐高階成章とともに掌握した幸運であり、江典侍美子がその夫大弐惟憲とともに握ったのに劣らぬ巨富であった。……賢子こそは、母の紫式部が抑圧し内攻していた出世欲・物質欲を十分に満足させた、いわば母親の悲願どおりに生きた孝の子というべきであろうか。[20]

紫式部が、これほどまでに切歯扼腕したか、「出世欲・物質欲」がどれほどの「悲願」であったか。資料不足というべきか、あるいは読解力不足というべきか、稿者には断言できないところが少なくない。が、賢子がゆきついた結果はみごとに符合している。

それも、おそらく孝標女の知るところだったろう。

（第一講了）

注

（1）①『講義　日本物語文学小史』（金壽堂出版、二〇〇九年一〇月刊）、②『講義『源氏物語』とは何か』（廣田收、二〇一一年一〇月刊）。ただし、廣田收の私信での教示によれば、①のハードカバー版は奥付には「非売品」とあり、廣田から各方面に寄贈されたものだが、少部数ソフトカバー版がつくられて市販されたらしい。

（2）堀口悟・横井孝・久下裕利編『平安後期物語引歌索引―狭衣・寝覚・浜松―』（新典社、一九九一年四月刊）。

（3）『更級日記』本文は定家自筆本により、『新編日本古典文学全集』でその所在をしめした。

（4）津本信博『更級日記の研究』（早稲田大学出版部、一九八二年七月刊）「菅原孝標女とその周辺の人々」、八九～九〇頁。

（5）福家俊幸「『更級日記』と物語創作――記されない意味」（和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究――孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年九月刊、所収）、引用は四五・五〇頁より。

（6）横井孝『円環としての源氏物語』（新典社、一九九九年五月刊）第Ⅳ章第四節「読者としての藤原賢子論」。

（7）久下裕利「迷走する孝標女――石山詣から初瀬詣へ」（福家俊幸・久下裕利編『王朝女流日記を考える――追憶の風景』武蔵野書院、二〇一一年一月刊、所収）、二二七～二二八頁。

（8）横井孝「紫式部日記の「効用」――白詩への架橋をとおして」（仁平道明編『源氏物語と白氏文集』新典社、二〇一二年五月刊、所収）。

（9）柿本奨『蜻蛉日記』（角川文庫・旧版、角川書店、

一九六七年一一月刊）「解説」三三七頁。

（10）萩谷朴『紫式部日記全注釈・下巻』（角川書店、一九七三年三月刊）、五一五～五一六頁。

（11）神田秀夫「紫式部日記の「侍り」と消息文」（『国語と国文学』第三三巻第三号、一九五六年一一月。のち神田秀夫論稿集2『古小説としての源氏物語』明治書院、一九八四年一月刊、所収）。

（12）萩谷朴『紫式部日記全注釈・上巻』（角川書店、一九七一年一一月刊）、九七頁。

（13）『枕草子』本文は、角川文庫『新版枕草子・下巻』（角川書店、一九八〇年四月刊）によったが、萩谷朴『枕草子解環・四』（同朋舎、一九八三年四月刊）を参照して訂した箇所がある。

（14）『紫式部日記』本文は岩波・新日本古典文学大系により、その所在の頁数を明示した。ただし、黒川本・松平文庫本などを参照し、表記に私意をもちいた。

（15）横井、前掲注（8）論、三〇八頁。

（16）今井源衛『紫式部』（人物叢書、吉川弘文館、）。のち『今井源衛著作集3・紫式部の生涯』（笠間書院、二〇〇三年七月刊）所収。引用は著作集、七一頁より。

（17）稲賀敬二『源氏の作者　紫式部』（新典社、一九八二年一一月刊）。

（18）『栄花物語』本文は小学館・新編日本古典文学全集による。第2巻、五三〇頁。

（19）稲賀、前掲注（17）書、二三九頁。

（20）萩谷、前掲注（12）書、一一四頁。

（よこい　たかし・実践女子大学教授）